

研究所ニュース

ね ざ す

第80号 2016年10月発行

発行：一般財団法人 神奈川県高等学校教育会館 教育研究所

〒220-8566 横浜市西区藤棚町2-197 電話：045 (231) 2546 F A X : 045 (241) 2700 e-mail : GAE02106@nifty.ne.jp

神奈川県高等学校教育会館 教育研究所 2016年教育討論会

「県立高校改革実施計画 不安なゆくえ」

日 時 11月12日(土) 14:00より(13:30開場) 17:00終了予定

場 所 中小企業センタービル(JR関内駅から徒歩してロイヤルホストの先)
14階 多目的ホール

〒231-0015 横浜市中区尾上町5-80 Tel 045-633-5019

参加費 無料

シンポジスト

菊 地 栄 治さん (早稲田大学)

岩 崎 長 久さん (神高教)

金 澤 信 之さん (田奈高校)

コーディネーター

加 藤 将さん (神奈川工業高校)

主 催：(一財)神奈川県高等学校教育会館教育研究所

共 催：神奈川県教育文化研究所

【お問い合わせ】

(一般財団法人)

神奈川県高等学校教育会館教育研究所

〒220 - 8566

神奈川県横浜市西区藤棚町2 - 197

TEL 045 - 231 - 2546

FAX 045 - 241 - 2700



シンポジストからのメッセージ

菊地栄治 (早稲田大学)

高校教育改革をめぐる議論が喧しい。グローバルな社会変化への対応を謳い文句に、新自由主義と新保守主義に忠実なる個人を「製造」しようとしているのではないか。中教審答申のキーワードは、どちらにも転びそうなコンセプトが目立つ。鍵概念を三つ挙げるとすれば、①公共(性)、②カリキュラム・マネジメント、③アクティブ・ラーニング、となるだろう。たとえば、公共も「公共の福祉」か「公益および公の秩序」かによって違いである。未来を生きる世代に受け渡すに値する高校教育改革をめざすとすれば、少なくとも前者の意味で捉えていくことが欠かせない。もっと心配なのは、実施主体間の関係性である。教育改革病を煩わされ、多忙化の現実を背負い込まれる中で、教師たちはさらに元気を吸い取られる改革に苛まれている。設置主体もしくは各高校レベルで、トップダウンの運営が目立ち、リーダーシップ概念のはき違えが生じている。形式主義に堕し、諦めや委縮という「病」がしのびより始めている。人権という対等で根源的な地点を出発点にしつつ、小さくされた声に耳を傾け、多様な価値を大切にしていくこと…すなわち、インクルーシブな教育社会づくりをそれぞれの場で試みなければならない。その際、生徒のみならず、教師一人ひとりが社会の形成主

体として育っていくことが必要である。仮に教職が専門職であるとすればなおさら自律性は欠かせない。それは、創造性豊かな実践が生み出される条件でもある。間違った方向で高校教育を動かしていくのではなく、高校教育の現実に関心を傾け、歴史認識と哲学を鍛えていくことを通して、改革の内実をより豊かにしていきたい。私たちはいま、重大な岐路に立たされている。

岩崎長久 (神高教執行部)

1990年以降の生徒急減にともない、神奈川県では県立高校改革推進計画(2000～09)による再編・統合で県立高校が25校減り、現在は142校となっている。冷戦終結による世界市場の一体化でバブル経済が本格的に崩壊し、少子化対応として「量的調整」と「質的転換」を図るものだった。この間、人事評価制度(2003)と総括教諭・企画会議(2006)の導入や教育基本法の改定(2006)もあり、学校現場は大きく変容した。

前回の改革から6年しか経ずして、今後の生徒減も前回より一桁少ないにもかかわらず、県教委は新たな県立高校改革実施計画(2016～27)を策定し、20～30校程度減ずるとしている。2000年代の人事評価制度の導入と学校運営組織の改革は、PDCAサイクルによる成果主義と「学校の役所化」を招いた。10年ごとの学習指導要領告示を

変革契機としてきた学校現場が、2～3年で異動する行政組織の論理に引きずられている。

前回改革は、「個が生きる教育」を掲げ、「多様で柔軟な教育」と「開かれた高校」を標榜していた。今回の改革は、「スチューデント・ファースト」とは言うものの、全校に「ミッション」を課し、各種「指定校」を創設した。予め学校に適した生徒を受け入れるならば、重点目標としている「インクルーシブ教育の推進」とは相容れない。進学重点校エントリー校は、新たに導入される生徒学力調査や進学実績により競争させられ、具体的な「成果」が求められている。

3.11後、ますます余裕の無くなった日本社会は、市場原理主義が闊歩し、競争によって格差が増幅されている。居場所としての学校の機能が低下すれば、ゆたかな感受性や共感能力は育たず、共生社会の実現は遠のくばかりだ。

金澤信之(田奈高校)

「県立高校改革実施計画」は2016年度を初年度として2027年度を目途とした12年間に及ぶ。この12年間には前回の改革(「県立高校改革推進計画」)とは大きな違いがある。前回は1988年にピークを迎えた公立中学卒業生約12万人が2005年には約6万人台まで減少するという生徒急減期の再編・統合であった。公立中学校卒業予定者の推移を見ると、2017年3月が69,885人で、計画修了の2028年3月は62,950人となっている。概ね65,000人以上の卒業生であり、ほぼ横這

いと言っている。結果として、前回の改革で1学年6～8クラスを適正規模としていたものを1学年8～10クラスとすることで、今回の改革は統廃合を可能にした。この改革は2012年に知事を本部長として発足した「緊急財政対策本部調査会」に始まったものであり、経費の削減は避けては通れない課題であったのだろう。改革は行政を起点としている。さらに専門コース制の全廃、総合学科の縮小、学力向上進学重点校、学校経営力など。この学校経営については、今回の計画のもとになった2014年の「県立高校改革推進検討協議会(報告)」に単位修得型の教職員研修制度の導入が記された。今以上の教員管理が進行するのだろうか。だが、現場は世界的にも例を見ない多忙化の状況にある。当研究所が実施した「教員の意識調査」によれば、「教員間で教育観や教育方針に関する議論が少なくなっている」と感じる教員は2003年に77.5%、2012年には86.6%へと増加している。しかし、格差社会の中で教育の市場化と高校の序列化は進み、子どもの貧困率も16%を超えた。現場から声を上げ続けなければならない。

編集後記

ぜひ教育討論会に参加していただいて、ご自身の学校で行われている「改革」についてご発言ください。発言していただくことで、個々の問題が共有化され、「改革」の全体像が臆気ながら見えてきます。

そして、全体が見えることで、各学校の「改革」のゆくえも見えてくるはずです。
(手島)

『ねざす』 No. 58

2016年11月発行予定



ねざす No.58 目次 November 2016

巻頭言 古い体質の組織と新しい試み ～現場の活動からの洞察～ ……中 田 正 敏

特集Ⅰ カオスのなかの学校現場

- ◇ 公開研究会の報告 …………… 教育 研 究 所
- ◇ 神奈川の高校現場は改革期、それとも混乱期？ …………… 加 藤 将
- 公開研究会に参加して—

特集Ⅱ 「県立高校改革実施計画」②

- ◇ 改革実施計画から何を考えていくか …………… 井 上 恭 宏
- ◇ 総合学科高校の行方
- 「全日制総合学科改善実施計画」を批判する— …………… 長 瀬 重 夫
- ◇ 演劇に係る学校設定教科科目の誕生と終焉
- 主権者教育へのアプローチを巡って— …………… 久 世 公 孝

学校から学校へ

横須賀明光高校 — 国際的な視野と福祉の心を持つ人を育てる — ……三 田 俊 明

寄稿

- ◇ 免許更新制導入10年 — その批判と実践 — (上) …………… 綿 引 光 友

所員レポート

- ◇ 地域から見た学校との連携 …………… 鈴 木 晶 子

読者のページ

- ◇ 高校教師を辞めて6年目の秋 …………… 柳 川 浩 三
- 先生に、なりたい！ —教職をめざす若者たち— (3) …………… 高 村 裕 一
- 書評『生存教室 デストピアを生き抜くために』 …………… 松 長 智 美
- 映画に観る教育と社会 (23)「マイケル・ムーアの世界侵略のススメ」 …… 井 上 恭 宏
- 海外の教育事情 (22) …………… 記事紹介 山 梨 彰
- 論 評 佐々木 賢

『ねざす』に何が書かれてきたか

—教育研究所創立30周年記念に際して— (上) …………… 教 育 研 究 会